様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １０ 日現在

機関番号：１３５０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2014
課題番号：２３５３０９９４

研究課題名（和文）ヨーロッパ学校衛生論史研究

研究課題名（英文）History of School Hygiene in Europe

研究代表者
寺崎　弘昭（TERASAKI, Hiroaki）

山梨大学・総合研究部・教授

研究者番号：６０１６３９１１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,800,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究の目的は、欧米における「学校衛生」の歴史的展開を、とくにその「精神衛生」化の過程に焦点を合わせて明らかにすることである。
　学校衛生の「精神衛生」の過程を凝縮したかたちを示す事例を、われわれは、1904年から1913年にかけて4回にわたり開催された「学校衛生国際会議」の展開と転回に見出した。そこで、「学校衛生国際会議」記録の分析を綿密に実施し、その成果を軸に、学校教育の「衛生」化・「精神衛生」化のプロセスを詳細に跡づけることができた。成果として、「学校衛生」の歴史的特異性に関する分析を含む、最終報告書(102頁)を刊行した。

研究成果の概要（英文）：　We attempted to clarify the historical development of “school hygiene” in Europe and the United States, focusing on the intrusion process of “mental hygiene”.
　Through our research, especially by analyzing the development of discourses in International Congress on School Hygiene which was held in 1904, 1907, 1910 and 1913, we have successfully clarified the typical process of mental hygienization of school education, with the emphasis on the important role of William H. Burnham. We published final report (March 2015, 102 pages) including our analysis of the historical characteristics of the concept of “school hygiene”.

研究分野：教育史

キーワード：学校衛生国際会議　西洋教育史　身心思想　精神衛生　心理学化

１．研究開始当初の背景

(1) 「身心の健康」への配慮を学校教育において定着させた「学校衛生」という概念と施策は、明治以降に西洋から移入された「学校衛生」(School Hygiene)論によって規定されている。それは、19 世紀以降のヨーロッパにおいて盛んになった「衛生」論(「社会衛生」等)の展開の中で「学校」という場が着目され、学校を「衛生化」する流れのなかで形成された歴史的概念である。今日の学校教育言説の直接的な源流である、この欧米における「学校衛生」概念の展開を解明することは、必須の課題である。
(2) 教育史家ソル・コーエン(Sol Cohen)も、その著書『新しい教育文化史にむけて(*Challenging Orthodoxies: toward a new Cultural History of Education*)』(1999 年)において、20 世紀を通じての教育言説への「精神衛生(mental hygiene)」的配慮の浸透と、それによる教育の「医学化(medicalization)」=「衛生化」(hygienization)の展開を指摘しているところである。
(3) しかしながら、欧米における「学校衛生」概念の展開を凝縮して提示していると思われる、20 世紀初頭に開催されていた「学校衛生国際会議」(International Congress on School Hygiene)について、それを正面から対象として解明した先行研究は皆無であり、学校衛生論史に関する先行研究そのものが未開拓のままの状態であると判断された。
(4) このような研究課題に気づかされ、また「学校衛生国際会議」(International Congress on School Hygiene)の存在とその重要性に気づかされたのは、石川啓二・阿部茂両氏と共に「「身心の健康と教育」に関する基礎的・歴史的研究 ― 「学校衛生」の展開を軸に」(平成 19-22 年度科学研究費、基盤研究(C) 、課題番号 19530686)を遂行し、日本の「学校衛生」の特質を長期波動の衛生思想史のなかに位置づけるべく、欧米から移入された学校衛生論との比較研究に従事しているなかにおいてであった。

２．研究の目的

本研究の目的は、欧米における「学校衛生」の歴史的展開を、とくにその「精神衛生(mental hygiene)」化の過程に焦点を合わせて明らかにすることである。そのさい、1904 年から 1913 年にかけて 4 回にわたり開催された「学校衛生国際会議」(International Congress on School Hygiene)の展開に焦点を合わせ、学校教育の「衛生」化・「精神衛生」化のプロセスを詳細に跡づける。

３．研究の方法

本研究の主たる作業課題は、三層構造で整理される。
(1) なによりも、1904 年 4 月 4 - 9 日にニュールンベルクで第 1 回が開催された「学校衛生国際会議」のその後も含めた展開の全容を解明すること。そのために、会議録の全回分を蒐集し分析すること。
(2) その裾野を成す、英・仏・独・米の学校衛生論著作を系統的に蒐集し、各語圏別に分析すること。
(3) それらの分析に資するベースとして、身心思想史(身心医学史・社会衛生史を含む)研究の知見に学び、19 世紀後半以降支配的になる「学校衛生」概念の歴史的特異性を照射することに資する。

４．研究成果

1904 年から 1913 年にかけて 4 回にわたり開催された「学校衛生国際会議」(International Congress on School Hygiene)の展開と転回を分析することを軸に、学校教育の「衛生」化・「精神衛生」化のプロセスを詳細に跡づけることができた。その成果として、「学校衛生」の歴史的特異性に関する分析を含む、最終成果報告書(102 頁)を印刷・刊行した。
研究成果として、蒐集・分析した史料の主なものについて、以下の３つの内容から成る「資料篇 : 学校衛生国際会議関連資料」をデータベースとして作成した。但し、これについては、分量の都合上、最終成果報告書には盛り込めなかった。

1. 学校衛生国際会議(1～4)会議録目次
2. 学校衛生国際雑誌 1—9 (1905 – 1914) 目次
3. 学校衛生論著作目次一覧

最終成果報告書『ヨーロッパ学校衛生論史研究(History of School Hygiene in Europe)』(2015 年 3 月、102 pages)の目次は、以下のようである。(なお、第 3 章は連携研究者である河合務、第 4 章は同じく山岸利次によって執筆された。)

はしがき—本研究の概要
第 1 章　学校衛生国際会議の展開と転回 1904～1913— 学校教育の「精神衛生(mental hygiene)」化
第 2 章　「衛生」・「健康」の系譜学—古層としての養生論世界
第 3 章　学校教育の衛生化と賞罰論— A. ニューズホームの学校衛生論の分析
第 4 章　翻訳: グリースバッハ「医学と教育学の関係」

主な内容は、以下のようになっている。
1904 年にドイツのニュールンベルクで第 1 回会議が開催された学校衛生国際会議は、その後も、第 2 回が 1907 年にイギリスのロンドン、第 3 回が 1910 年にフランスのパリ、そして第 4 回が 1913 年にアメリカ合衆国ニューヨーク州のバッファローで開催された。
その会議録は、開催の翌年までにはまとめられ、それぞれ以下のようなタイトルで刊行

されている。

1. *Bericht über den I. Internationalen Kongreß für Sculhygiene*, Nürnberg, 1904
2. *Second International Congress on School Hygiene: Transaction*s, London, 1908
3. *IIIe Congrès International d'Hygiène Scolair*e, Paris, 1910
4. Fourth International Congress on School Hygiene: Transactions, Buffalo, 1914

また、同時並行的に、『学校衛生国際雑誌(Internationales Archiv für Schulhygiene, Archives internationals d'hygiène scolaire, International Magazine of School Hygiene)』が、1905 年から 1914 年にわたって、第 1 巻から第 9 巻まで発行された。第 5 巻まではドイツのライプツィッヒ(Leipzig)、以降第 9 巻まではミュンヘン(München)を刊行地としている。

これら一連の会議録の流れを見れば、第 1 回会議においては、筆頭の第 A 分科会は「学校建築」が主題となる「校舎衛生」で、既に 19 世紀末までに確立しさまざまな学校衛生論著作でお馴染みの様相を見せている。第 B 分科会で教授・教材・知育の衛生がテーマ名で並んでいても、それはいわば作業能率・疲労との関係で論じられるにとどまっており、19 世紀末までに形成された既存の「学校衛生」枠組みの精華を誇るかのような国際展示会の印象を免れない。すなわち、「旧来の「学校衛生」(the old-time "school hygiene")」のデモンストレーションとみなされてよいのが第 1 回ニュールンベルク大会だった。そのことは、学校衛生国際会議初代会長グリースバッハの第 2 回ロンドン大会における講演「医学と教育学の関係」においても示されており、そこでは脳研究(Hirnforschung)への着目さらにはカリキュラム改革提言にまで踏み込んではいるが、しかしその大要は、学校医(Schularzt)制度の拡充を中心として「教育制度を生理・衛生学的(physiologisch und hygienisch)根拠に基づいて構築しよう」とする関心に貫かれるにとどまっていた。その意味で、第 1 回学校衛生国際会議の内容は、1870 年代には独・英・米・仏で散見されるようになった「学校衛生(School Hygiene)」を題名に冠する著作群が開示したものをほぼそのまま踏襲している。それは、「教育的」であるためにはその基礎に「医学的」=「衛生」的配慮—といっても解剖・生理学をベースにした—がなければならない、という観念を支配的にする言説潮流を形成したものといってよい。

ところが、学校衛生国際会議会議録を第 1 回から第 4 回まで通覧すれば、学校衛生の漸進的展開・拡大と同時に、その論質が「学校教育」諸活動のことごとくを語る語り口と道具立てを新たに特徴づける特異な存在様式として大きく転回し、その言説の「歴史的アプリオリとしてのポジティヴィテ(positivité)」を創出した様を見せつけられることになる。決定的な転回が誰の目にも明らかになるのは、1913 年第 4 回学校衛生国際会議においてである。この第 4 回に至ると、たしかに第 1 分科会こそ「学校建築」になってはいるが、全 46 分科会のうち、第 13 から第 15 分科会まで三つの分科会が、同一のテーマ(MENTAL HYGIENE AND THE HYGIENE OF THE MENTALLY ABNORMAL CHILD)でパート 1 からパート 3 まで並び立ち、そしてそれらを総括するかのように第 41 分科会(Session XLI — SYMPOSIUM on Mental Hygiene and Hygiene of the Mentally Abnormal Child)ではシンポジウムまでが幅を利かせて目立っている。「精神衛生(Mental Hygiene)」を分科会名に正面立てて掲げる分科会が圧倒する。

この「精神衛生」の氾濫を特徴とする「学校衛生」の転回は、実は、その萌芽を、1907 年にロンドンで開催された第 2 回学校衛生国際会議で見出された変化に認めることができる。その第 2 回大会の筆頭第 1 分科会は、画期的なことに、学校建築をテーマとするものではなく、「教育方法・課業の生理学と心理学(The Physiology and Psychology of Educational Methods and Work)」と題して、28 本の講演で構成されるものだったのである。

(1) 第 1 章では、この一連の会議記録における言説展開を詳細に分析し、「学校衛生(school hygiene)」概念の展開を跡づけ、第 2 回会議を変曲点として第 4 回会議において教育の「精神衛生(mental hygiene)」化の湧溢・前面化が見られ、それによって「学校衛生」の転回と学校教育の全面的「衛生化」が極点に達した次第を明らかにした。

そのさい、ウィリアム・H・バーナム(William H. Burnham 1855-1941)の役割を浮かび上がらせた。バーナムは、ナンス(R. Dale Nance)が紹介しているように、いまでは「忘れられた心理学者・教育パイオニア」ではあるが、当時クラーク大学学長 G・スタンレー・ホールの盟友の一人であり、1888 年博士論文が記憶研究、1889 年に「知的労働のエコノミー」論文、1892 年に「記憶の錯覚」論文、1908 年に「注意と興味」論文・「疲労の問題」論文、1917 年に「神経システムの発達における刺激の意義」論文など、他方で 1903 年に「学校行政原理」論文、1908 年に共著『教育史』などを著していた。彼はまさに、後に『正常な精神—精神衛生と学校教授衛生入門』(1924 年)、『教育偉人と精神衛生』(1926 年)という教育史書、そして『完璧な人格—精神衛生への貢献』(1932 年)を著作として公刊し、彼の生涯の業績をまとめ上げることになる、クラーク大学「教育学・学校衛生(Pedagogy and School Hygiene)」講

座教授だったのである。そのバーナムが、第4 回学校衛生国際会議に「精神衛生(Mental Hygiene)」を分科会名に正面立てて掲げた三つの分科会のうち第1部として設定された第13 分科会最初の講演者として登壇する。その題目は、そのものずばり、「学校における精神衛生(Mental Hygiene in the School)」だった。またさらに、「精神衛生」分科会三つを総括するシンポジウムを内容とする第 41 分科会で、旗頭として登壇したウィリアム・H・バーナムの講演「精神衛生のいくつかの原理(Some Principles of Mental Hygiene)」は、「精神衛生」体系の骨格を新たに簡潔明瞭に提示し「学校衛生」における「精神衛生」研究の方向性を定めようとするバーナムの意欲が見てとれ、第4回学校衛生国際会議の白眉と目されるものである。その講演のなかで、バーナムは、「精神衛生(mental hygiene)」の4 つの原理を提示したが、そのうち新たに加わった主題として「(3) 感情(feeling)に対する正常な反応」について詳細に論じた。「フロイトとその弟子たち」に言及することから始めたその講演は、その成果をヴュルツブルク学派等実験心理学が見出した「態度(attitudes)」(「内象(Einstellung)」)概念にとり込みそれを切り口にすることによって、学校教育の総体を—そのいわば内回りの活動はもとよりいまいわゆる「見えないカリキュラム」をも含め—「精神衛生(Mental Hygiene)」の支配下に置いて、学校の「衛生」化=「精神衛生」化を完遂するものであった。ここに、〈生-権力(bio-pouvoir)〉としての「医療ポリツァイ」を鼻祖とし 19 世紀社会衛生運動の一環として時流を形成した「学校衛生」は、さらに「精神衛生化(Mental Hygienization)」=「心理学化(Psychologization)」によって学校教育の中核を成す教育目的・教育方法の原理に蚕食し、学校教育諸活動の全体を丸呑みするに至ったことになる。それはそのまま、「教育学(pedagogy)」が、「精神衛生化」=「心理学化」によって蚕食・包含・横領される過程であった。

(2) また、第2章では、この「学校衛生」概念が身体と精神を包括するプロセスの歴史的特質に照明をあてるため、対比的に、18 世紀以前の養生論の構造を基層・古層として提示することを試みた。

(3) 第3章では、第2回ロンドン会議で参加・報告を行ったアーサー・ニューズホーム(Arthur Newsholme 1857-1943)の学校衛生論に関して、彼の著作『学校衛生(*School Hygiene*)』(1887 年)を中心として詳細に分析した。

(3) 第4章では、第1回学校衛生国際会議開催に際して初代会長に就任した、ヘルマン・アドルフ・グリースバッハ(Hermann Adolf Griesbach 1854-1941)の 1907 年第2回ロンドン会議での講演「医学と教育学の関係」の全訳を試み掲載した。

今回の研究成果によって、20 世紀初頭に開催された「学校衛生国際会議」が欧米における「学校衛生」概念の展開と転回—すなわち「精神衛生化(mental hygienization)」=「心理学化(psychologization)」による学校教育の全面的「医学化」=「衛生化」—を凝縮して提示していたことを明らかにし得た。

5．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　1件）

Hiroaki TERASAKI, “Reconsidering the Meaning of Nourishing Life: An Attempt to Energize the Concept of Well-being” Nanami Suzuki ed., *The Anthropology of Aging and Well-being: Searching for the Space and Time to Cultivate Life Together*, Senri Ethnological Studies No. 80, National Museum of Ethnology, Osaka, 2013.1, pp.21-32

〔その他〕
山梨大学研究者総覧
http://erdb.yamanashi.ac.jp/rdb/A_DispDetail.Scholar

6．研究組織
(1)研究代表者
寺崎　弘昭（TERASAKI, Hiroaki）
山梨大学・総合研究部・教授
研究者番号：60163911

(2)研究分担者
該当なし

(3)連携研究者
白水 浩信（SHIROUZU, Hironobu）
北海道大学・教育学研究院・准教授
研究者番号：　90322198
河合 務（KAWAI, Tsutomu）
鳥取大学・地域学部・准教授
研究者番号：　10372674
山岸 利次（YAMAGISHI, Toshitsugu）
宮城大学・看護学部・准教授
研究者番号：　50352373